
金木犀

真雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金木犀

【コード】

N0559Z

【作者名】

真雪

【あらすじ】

不器用な女子高生二人のお話です。

プロローグ

「治らないんだって。」

腕から伸びた管よりも、締め切ったカーテンの中に満ちる消毒液の匂いが似合わない。真っ先にそう思うぐらい、その発言には現実味が無かった。

「先生とお母さんが話してるの聞いちゃったとか、漫画の中だけかと思ってた。」

傾げる首は細く、でもそれは入院が決まるずっと前から。

「嫌なものな、三流ドラマみたいで。あなたが教師になったところを見られなくて残念、とか言ってみる？素敵でしょ、安っぽくて。」

私の最低の成績を見て、長年の夢を聞いて、笑わなかったのは彼女だけだった。

「怖くないの？」

点滴されていない方の腕を引っ繰り返す。枕元の照明を点けない薄暗いスペースでは、新たに刻まれた何本かの赤い線しか分からない。その下に染込んだ何重の傷を全て取り除くことはできなくても、私は彼女の傍にいたかった。

「正直、ホツとしてる。さすがに自殺はちよつとね、外聞悪いし。」

外聞が悪い。私たちの方言で言ってしまうは「げえぶんわりい」になるが、この故郷を嫌う彼女の口から終そその言い方を聞くことはなかった。彼女の意識する標準語は、返って発言のひとつひとつを頑なにただけだったような気もする。

「残り、半年だって。あ、余命って言った方がいい？そんなにゆとり持たなくなっただけいいのになあ。」

「いつならいいの？」

「明日、とか。」

半年。六ヶ月。日数に換算するのは生々しくてできなかった。

「寂しい？」

どこを見ているか分からない、けれど真っ直ぐな横顔をずっと見ていたかった。白い肌に触れるのは時折でいい、紡ぐ言葉に笑みを返すことはできるから。

「寂しいよ。」

異なる性別じゃなくなつて、それぐらいは許されたはずだ。

「…うん、こう言ったら抱き締めてくれると思った。遅いよ、まったく。」

私の背中に回る腕に引つ張られ、点滴台がカタンと鳴った。

「ごめんなさい、香りが強いから持つていくのはお母さんに止められたの。匂い、分かる？」

「分かるよ。ほぼあなたの匂いと一体化してるけど、ちゃんと分かる。」

セーラーの襟から零れる金木犀の香りに、彼女はゆっくりと顔を埋める。二人で見つけた大きな樹に咲く橙の花は、今年も街中にその香りを振り撒く。

「半年つて言ったわね。」

「うん。」

「死んだらすぐ、誰かの腹に入って。それがシングルマザーでもあなたが男でも女でも構わない、すぐに生まれ変わって。十七年なら、私独りでも頑張つて待てるから。」

「十七年経つたら、あなたの生徒になるの？」

「そうよ。教師と生徒なんて今時珍しくもないじゃない。」

きつい抱擁をほどこき、彼女と向き合う。瞳に潜む色が姿よりも香りが圧倒的な存在感を持つ花を連想させ、彼女は私に笑いかけた。

「半年向こうの十月先なら、次の私は冬生まれになるのね。温暖化、止まってるといいな。雪の中で生まれてみたい。」

その笑顔を見るたび、私はいつも喉から胸にかけて何かで塞がれているようだった。あまりの馨しさが息苦しさを伴わせる、あの花

に近付いたときと同じように。

「約束よ。絶対、約束だからね。」

『自分で遺体の処理はできないから』という理由で深くは腕を切らない彼女の死が、少しでも彼女を救う理由になりますように。非常識な祈りを込め、もう一度強く抱き締めた。

潮風

ああ、太陽って丸いんだ。

日の丸を国旗と謳う身でありながら、生まれて初めて知ったようにその事実に感動した。隣に並ぶ彼女の黒髪が潮風になびいて、水面と同じ光を含んだ毛先は夢のように綺麗だった。

「海を見たのなんて久しぶり。最後はいつだったのか、もう覚えてないや。」

船上に一番近い空を忙しなく行き交うかもめの鳴き声にかき消されそうなの、か細い声で彼女は言った。

「緋奈、起きて。」

目を開けると、莉子が本を片手に私の頭を撫でていた。

「面会時間、そろそろ終わるみたい。看護婦さんが見回りにくるから。」

「ああ、うん…また明日。」

「気をつけてね。」

上半身だけ起こした莉子の膝元に突っ伏して寝ていたらしい。制服に少し皺がついていた。

私の乱れた前髪を莉子が冷たい手で直す。軽い別れの挨拶をして、病室を出るまでお互い視線は外さない。残り少ない時間の中で、私は一挙一動に想いを込めた。

「じゃあね。」

「うん。」

私の最愛の彼女、楠美莉子は、あと二ヶ月で自殺をする。

「死にたいっていうかね、消えたいの。最初から私なんていなかったみたいに、跡形も無く。」

手首の傷を私が見つけたとき、彼女はひどく穏やかにそう言った。

あまり隠すことに過敏になってはいないようだった。

「どうして？」

声を震わせないのでがやっとだった。私はそのとき既に彼女を愛していたから、友達としてではなく、性を持って愛してしまっていたから、彼女の発言は憎しみが湧くほど悲しかった。

「生きるのが嫌になったとかじゃないよ。私は凄く恵まれた立場にいるから、朝になるのが怖くなるほど不幸な出来事を味わったことがない。」

胸まで真っ直ぐに伸びた艶やかな髪、整った顔立ち、すらりとした四肢は白く、黒子の少ない肌は輝くようだった。確かに完璧と言っているほど、彼女は恵まれていた。

「じゃあ、どうして。あなた頭いいし、お金だってあるんだし、大学も選び放題じゃない。それで未来に希望が見出せないなんて言わないですよ。」

私は自分が微塵にも彼女の視界に入っていないことを知っていた。私だけではない。彼女はたぶん、全ての人間に興味を持っていなかった。私がどれほど必死に訴えても、耳を傾けるふりをしたままだ。それもひどく上手に、美しく。

「いらないよ、未来なんて。」

微笑を保ったまま、彼女はゆっくりと言った。

「これ以上何も欲しくないし、何も失くしたくない。だから今のまま、終わりにしたい。」

確かあれは教室で、西日が窓際の机に腰掛ける彼女の頬を淡く染めていて、八重桜が散り始めたころだった。

「そういうのって、」

もう震えを隠すことは出来なかった。だから隠さなかった。「ずるいことだと思う。」

私が誰より貴方に生きて欲しいことを知っているくせに。今この瞬間、うっとりするほど哀しい笑顔を私だけに見せるのは卑怯だ。

彼女は不意に相好を崩すと、力なく下げた私の右手を両手で包んで

持ち上げた。唐突な行動に戸惑う間もなく、右手は彼女の手によってふくよかな胸の谷間に押し付けられた。

「知らないの？自殺志願者って、この世で一番身勝手な人のことを言うんだよ。」

右腕の血管を足場に、彼女の鼓動と感触が私の心臓まで一直線に走ってきた。生きている音はうるさいくらい聞こえるのに、その瞳に光は宿っていなかった。

病院から出ると、北風が雪の匂いを含んでいるのに気がついてマフラーを巻き直した。コートのポケットに両手を入れて、莉子の膝元で見ていた夢を反芻する。

あれはフェリーの上だ。修学旅行で乗った、莉子も私も初めてのフェリーだった。風が強くて、制服だった女子はスカートが捲りあがってしまったように数人で身を寄せていた。私たちは二人でびったりくっついて、止まない飛沫と絨毯のように同じ色が広がる海面を見つめていた。

莉子は口数の少ない子だった。普通の子だったら地味で暗い子に分類されるような性格だけど、華やかな顔立ちと抜群のスタイルのせいで大人びた特別な子だと認識されていた。

それまで皆勤賞だった莉子は、修学旅行を前にして全く学校に来なくなつた。クラスメイトはお決まりのように妊娠でもしたんじゃないかと騒ぎ出し、当然の如く莉子と一番仲が良い（ということになっている）私にも好奇の目を向けた。情報を求められることもたびたびあったが、莉子の笑顔を真似すると上手にかわせることがついた。口の端をきゅっとあげて、穏やかに、努めて冷静に自分の言い分を相手に伝える。目は無表情を保ったまま。私は莉子ほど整った顔立ちは持っていないから迫力こそないけれど、十分に効果的だった。

噂がでっちあげたかなり年上の彼氏に孕まされたわけでも、野放図な親が積み立てを忘れていたわけでもない。単純に彼女は旅行に

行きたくなかったのだ。

私は莉子と行動するのを楽しみにしていたけれど、集団行動が大嫌いな彼女が四泊五日も辛抱できるわけがないだろうと半ば諦めてもいた。

だから出発を控えた夜遅く、莉子が電話してきたときは本当に意外だった。驚く私をよそに、淡々としおりの細かい点を訪ねる莉子に目立った変化はなかった。日に日にエスカレートする噂を伝えると、そう、と言っただけでホテルの部屋割りへと話題を移した。派手な容姿と派手な家柄のせいで無責任な噂には慣れていたから、今回もある程度予想していたのだと思う。えげつない内容だったのにも関わらず、反応はいつもと変わらなかった。

彼女と少しでも関わっていると、いきなり大人になったような気になった。本当は、愛だとか恋だとかそういう言葉だけで浮かれられるようなクラスメイトと大差無い子どもだったのに、それに気づくのが随分と遅くなってしまった。だから痛み慣れることのできるひとがいるなんて、とんでもない勘違いができたのだ。

電話を切つてすぐにベッドに入ったけれど、結局夜明けまで寝付くことはできなかった。莉子と同じ部屋で眠ることができるなんて夢みたいだと思つ反面、強い不安を抱いた。自慰を覚えたばかりの男子中学生並みに盛っていた私は莉子に何もしない自信がなかった。莉子の胸や太腿を熱心に追う男子たちよりも遥かにその思いが深刻だということを自覚していた。

寝不足のまま学校に集合して、バスの中や飛行機の中で私たちは肩を寄せ合つて眠った。よく眠れなかったのは莉子も同じなのだろう、目の下が真っ黒だった。莉子は雪国に相応しい肌の色をしているから余計に目立つ。最も、生まれ育った故郷を何より嫌う彼女はそんな風に褒められてもちつとも嬉しくはなかっただろうから口には出さなかった。

海の無い街で育つた私たちに、夕暮れ時のフェリーは最高の贅沢だった。太陽は自然しか生み出せないような円い形で、海にその身

を沈めるときに最も紅が深くなつて、そのときに放つ光は見た者全てに言い表し難い希望と切なさを与えることを、私は初めて知つた。陸地が見えない間、私の視界に入っていたのは莉子と海とかもめだけだったから、耳に入るのは波の音と微かな吐息だけだったから、世界中で二人だけみたいだった。

「莉子。」

「なに？」

私が莉子に対する願いはいつだって非常識で、どうしようもないくらい自己中だ。あまりに乱暴で強烈なその願いが繊細な彼女を傷つけやしないかと、私はいつも不安だった。誰かを狂おしくなるほど好きになつたのは初めてだったから、制御する術を誰かに教えて欲しかった。だけど誰にも言えなかつた。

「海、綺麗だね。」

「うん、すつごくきれい。来て良かった。」

莉子がかもめの子じゃなかつたら、私が違う性を持っていたら、こんなに悩まずに済んだのだろうか。莉子の名前を呼ぶたび、桜色の爪に触れるたび、そんなことばかり考えていた。

「莉子、毛先からまつてるよ。きしきしになつてる。」

港を発車したバスの座席で、私は莉子の髪に触れた。船が海を渡る間、潮風を浴び続けた私たちの髪はこれまでにない痛み方をしていて、予想もしなかつた出来事が連続する修学旅行に改めて感謝した。莉子が笑っている。私の隣で笑っている。これ以上何もいらない。いらなれないと思わなければならぬ。

「櫛貸して、梳かしてあげる。痛かつたら言つてね。」

彼女は決して、私のものにはならない。例え地球上の海を意のままに操ることができたとしても、彼女は私に見向きもしないだろう。だけど、呼びかければ応えてくれる。隣に座れば寄り添ってくれる。その瞳に誰も写っていなくとも。

「そんなにひどい？」

「ひどい。くるんくるんになつてるもん、夕飯終わったらすぐお

風呂だね。先に入っていていいよ。」

「そうする、ありがと。」

こうして髪に触れられるだけで、うつらうつらと舟を漕いでおりてきた臉を見つめられるだけで、世界中の幸福がこの手に集結したような心地になる。

「ちよつとはマシになったよ。」

梳かし終えた髪にはまだ潮の匂いが残っていた。寝惚けた彼女に櫂を握らせ、周りを見渡すとガイドさんを含めてバスに座るほぼ全員が眠っていた。明日からまた始まる日常を忘れるように、私は莉子を見つめた。上下の睫が微かに動き重なる様は、可憐な花に止まり蜜を吸う蝶の羽にそっくりで、溜息が零れるほど美しかった。この美しさに魅入られてしまえば、もう二度と後戻りはできないことを知っていた。

「莉子、旅行楽しかった？」

「うん、楽しかった。」

「そっか。」

空港からバスで地元に戻る中で、私たちが交わした言葉はそれだけだった。莉子が余命宣告を受けたのは、それから一週間後、街の金木犀が今年初めての花をつけた日だった。

帰り道

苦悩は比較の対象に成り得ない。彼女を愛して気づいたことのひとつだ。私は相手を愛しているけど、相手は私に見向きもしない、そんな関係は言ってみれば世界の縮図に近い。すれ違うからこそ人の気持ちは尊いのだと思う人もいるし、欲しくて欲しくてたまらないのに入る確率がゼロを通り越してマイナスだということに気づいて狂ってしまう人もいる。私はというと、日々莉子に対して膨れ上がる気持ちを呆然と見つめている感じだった。自分のことなのに完全に成す術が無い。どうしようもないからほうっておいた。

だから莉子に付き合っただけと口にしたのも、私にとっては何回も頭の中で行った日常の一部だから緊張したりどもったりはしなかった。私は元々隠し事が上手くはないし、聡い彼女はとつくに気づいていたのだと思う。

「緋奈、そこそこモテるのに男に興味ないの？」

「そういうわけじゃないんだけど…格好いいなあって思う人はいるし。でも、どきどきはしない。ていうか私、莉子が初恋なんだよね。」

世間一般の、どこにでもいる女子高生がする恋話のような調子で、私たちはいつもの帰り道を歩きながら平然と話を続けた。後々思い返せば、ここまで好きになった相手なんだから一世一代の告白と捉えてもいいはずなのに、そのときは特に違和感や不満はなかった。

「へえ、そうなの？ 光栄、って言うべきかな。でも私ノーマルだから、セックスはできないよ。緋奈に触られても濡れないと思う。女の子としたことないから、分かんないけど。」

「男の人とはあるの？」

「うん。」

誰と、とは聞けなかった。ただ、私の知らない人であって欲しかった。

「私もしたことない。本とかで読んだことあるけど、莉子とセックスしたいとは…うーん、できたらできたで嬉しいんだらうけど、メインはそっちじゃないと思う。」

正直なところ、よくよく思い出してみれば私は女の子どころか異性にすらまともな恋愛感情を持ったことがなく、寝る寸前や起きた直後、授業中などに降ってきたように覚える疼きを性欲と呼んでいいのかも分かっていなかった。恋愛感情と性欲の区別もつかないまま彼女を求めるのはなんだか失礼な気がして、触りたくて触りたくてたまらなかつたけれど我慢した。

「ふうん…そんな好きもあるんだね。」

どこか他人事に、だけど莉子にしては珍しく興味深く言った。

「男女は突っ込んで出したら終わりでしょ。男同士も出したら終わりだと思っけど、女同士はどうするんだらうね。」

私が無気なくそう言ったら、ぴたりと急に莉子が足を止めた。私にそれが気づいたのは数歩進んだ後で、何事かと振り返ると莉子は何かを含んだような無表情で小首を傾げて言った。

「試してみる？」

「ごめんね、あんまり片付いてなくて。」

「ううん、私の部屋より綺麗。」

鼓動が速度を上げすぎてどっこん、どっこんと鈍い音を上げていた。マフラーと手袋を外して、投げ捨てるように床に置いた莉子は壁際に設置されたダブルベッドに腰掛けた。

「座って。」

言われるまますぐ隣に腰を下ろす。それと同時に、ことごと莉子が小さな頭を私の肩に預けた。ちっともロマンチックじゃない鼓動が聞こえないかと余計なことを心配し始めた私をよそに、莉子はゆつくりと口を開いた。

「さつきも言ったけどね、私は処女じゃない。ほとんど毎晩このベッドで好きでもない男の人に跨られて喘いでる。たぶん今夜も。」

ねえ緋奈、それでも私に触りたい？」

「うん。」

ほとんど反射だった。それは傍から見れば私の希望でしかないのかも入れないけれど、莉子はその、私が名前も知らない男の人も視界に入れていない。ただ自分が生まれる過程になったセックスを知りたくて、求めてきた男で試したただけなんだ。そして、今の私の状況も変わらない。絶対に子どもができないセックスが知りたいという理由だけで、私を自室に誘ったのだ。莉子が興味を持つのは人ではなく、世界に蔓延する少し特殊な事象のみだということを改めて思い知らされる。

「道具、使う？」

「上手に使えないと思うし、いいよ。」

「脱ぐ？脱がす？」

「…脱がす。」

分かった、と莉子はベッドの中央に寝転がった。薄いピンクのシートに広がる真っ黒な莉子の髪を見て、色っぽいつてこういうことか、と熱くなる頭の片隅でひどく冷静に思った。莉子の顔のすぐ横に置いた右手を支えに覆い被さると、もう鼓動の音は聞こえなくなっていた。

「緊張してるね、緋奈。脱がし方、分かる？」

「自分が着てる制服だもん、分かるよ。」

あやすような口調で莉子は私の左手を取ると、自分の頬にくっつけた。透けるように白い瞼を閉じ、通りすがりの人間に餌を差し出された野良猫のように擦り寄る。

「熱いね。不思議ね、緋奈は心もあったかいのにね。不思議。」

そう言っつて莉子が目を開けたとき、込み上げてくるものを涙と認識する間もなくそれは眼を乗り上げた。ぼだぼだぼだつと莉子の滑らかな頬に水滴が降り注ぐ。それに対して莉子は驚いたり嫌がったりせず、いつもと変わらない眼差しで私の言葉を待った。

「ごめん。」

「泣くのは悪いことじゃないでしょ。だから謝るのは違うよ。」
じゃあ何を言えばいいのか。涙の形をしているだけで、これは私が莉子に持つ感情そのものだ。肉体にしまっていることができなくなつて、莉子に向かつて飛び出した。擦つて出る男の精液と同じだ。順序を追つて触れてもいないのに出てくるなんて、なんてお手軽で安い身体だろう。

「悲しいの？」

悲しかった。あつけなく射精してしまった自分が情けなかった。

莉子を最初に抱いた男への嫉妬が渦巻いて苦しかった。零れた水滴は莉子の肌の上で珠になつて、それがまた彼女を穢してしまつたよ
うで嫌だつた。

これ以上莉子に涙が落ちてしまわないようにと身体を起こす。つられて起き上がった莉子は、聞き分けの無い子どもを見る母親のよ
うな慈愛に満ちた顔をしていた。

「緋奈、私のこと好き？」

「好きだよ。大好きだよ。」

涙声で重なる。愛してる、とは言えなかった。私は今、莉子に拒
絶されてもその感情を向けられるほどひたむきにはなれない。

「ありがとう。たぶん、緋奈がくれた気持ち全部返すことはでき
ないと思うけど、付き合うことはできると思う。どうする？」

「付き合つて。」

形だけでいいから、見せ掛けだけでいいから、私のものになつて。
「うん、分かつた。よろしくね。」

「でもさ、付き合つて具体的に何したらいいんだろね？」

それから二人で並んで寝転がつて、手を繋いで、外で降りしきる
雨のリズムに乗ってぽつりぽつりと話をした。

「お互いの家を行き来したり、手を繋いで出掛けたりつて普通の
友達でもできるよね。異性だったらそれだけで特別だと思うけど、
同性はそうもいかないじゃない？」

となると、やっぱりセックスしか思いつかない。だけどそんな風に安易な終着点を見出すのは嫌だった。

「莉子、たくさん告白されるでしょ。」

「そうだね、平均よりは多いかも。」

「今まで断るとき、なんて言ってた？」

「誰とも付き合っ気ないからって。」

なんてことない普通の天井なのに、一緒に見ているだけで満天の星空のように輝いて見えた。たぶん、私だけだけ。

「じゃあ今度からは、恋人がいるって断って。」

「誰って聞かれたらどうするの？」

「そこからは、莉子に任せる。」

「ん、分かった。」

繋いだ手を引っ張り、左の手首に幾重にも積み重なった細い細い傷痕を眺めると、莉子はふふつと微かに笑った。

「何で切ってるの？」

「カッターとか剃刀とか、色々。」

「いつから？」

「よく覚えてないや。中学入るより前だったと思うけど。」

「リスカって、死にたいけど生きたい人がするんじゃないの？ 莉子、本当に死にたいの？」

「…そんな難しいこと聞かないでよ。」

急に低くなつた莉子の声音に、ひゅつと息が止まった。仰向けのまま虚空を見つめる彼女の瞳の冷たさに、言いよつた無い恐怖を覚える。

「死にたいけど、自殺するわけにはいかなから。自分で自分の後始末はできないし、外聞だって悪いし。本当にいい子だったのになんでこんなことに、なんて安っぽい台詞でいっばいの葬式なんか絶対嫌。死んでも死に切れないよ。」

「じゃあ死なないでよ。生きようとしてよ。そう言いたかったけれど、莉子に安っぽいと思われのが怖くて黙ってしまった。私はや

っぱり臆病者だ。

「死なないように切るの。土砂降りが明けて流れが速くなった川とか、大型トラックが通りかかったときとかにふらって飛び込んだりやわらないように。」

何もかもを達観した彼女の横顔が切なかった。

「私は……」

私は、何も出来ない。

「私は、莉子に会えて嬉しいよ。これからも一緒にいたいよ。だから、生きていて欲しいよ。」

ただ、莉子を好きでいることしか出来ないのだ。

「ありがとう。」

言葉にすればこんなに簡素で分かりやすいことなのに、どうしても伝えることができないんだろう。また涙の形をした何かが溢れてしまわないように、私も莉子と同じように仰向けになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0559z/>

金木犀

2011年12月11日19時47分発行